福岡市埋蔵文化財調査報告書第888集

那　珂 42

—那珂遺跡群第103次調査報告—

2006

福岡市教育委員会

那　珂 42

―那珂遺跡群第103次調査報告―

遺跡略号　NAK-103
調査番号　0455

2006

福岡市教育委員会

巻頭写真１　調査区東側竪穴住居群（西から）

巻頭写真２　SE008（南東から）

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群第103次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで山根一貴様をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成18年３月31日
福岡市教育委員会
教育長　　植木　とみ子

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が平成16年度に博多区竹下５丁目425において実施した那珂遺跡群第103次調査の発掘調査報告書である。
2．遺構の実測は長家伸が行った。
3．遺物の実測は長家、吉留秀敏、渡辺尭志、福岡弘道、西江幸子が行った。
4．製図は長家、吉留が行った。
5．写真は長家が撮影した。
6．本書で用いる方位は磁北であり、座標北から６° 西偏し、真北から６° 18′ 西偏する。なお座標は日本測地系を使用している。
7．本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は竪穴住居跡（ＳＣ）、井戸（ＳＥ）、土坑（ＳＫ）、溝（ＳＤ）、不明遺構（ＳＸ）、ピット（ＳＰ）である。
8．本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9．本書の執筆は石器（95）については吉留が行いその他の執筆と編集を長家が行った。

遺跡調査番号	０４５５	遺跡略号	NAK－103		
所在地	博多区竹下5丁目425			分布地図番号	38—0085
開発面積	749.38㎡	調査対象面積	366.38㎡	調査面積	350㎡
調査期間	平成16年10月18日～平成16年11月25日			事前審査番号	16－2－337

本文目次

Ⅰ　はじめに…… 1
　1　調査にいたる経過…… 1
　2　調査体制…… 1
Ⅱ　調査の記録…… 1
　1　調査経過…… 1
　2　遺構と遺物…… 7
　　1）掘立柱建物…… 7
　　2）竪穴住居跡…… 9
　　3）井戸……18
　　4）土坑……20
　　5）溝……24
　　6）その他の遺構・遺物……24

挿図目次

第1図　調査区位置図1（1／50,000）…… 2
第2図　調査区位置図2（1／8,000）…… 3
第3図　調査区位置図3（1／500）…… 4
第4図　調査区全体図（1／100）…… 5
第5図　SB013及び出土遺物実測図（1／50、1／3）…… 6
第6図　SC009及び出土遺物実測図（1／50、1／3）…… 7
第7図　SC010・016及び出土遺物実測図（1／50、1／3）…… 8
第8図　SC011及び出土遺物実測図（1／50、1／3）…… 9
第9図　SC014及び出土遺物実測図（1／50、1／3）……10
第10図　SC015及び出土遺物実測図（1／50、1／3）……11
第11図　SC017及び出土遺物実測図（1／50、1／3）……11
第12図　SC020・021及び出土遺物実測図（1／50、1／3）……13
第13図　SC022実測図（1／50）……14
第14図　SE008及び出土遺物実測図1（1／30、1／3）……15
第15図　SE008出土遺物実測図2（1／3）……16
第16図　SE008出土遺物実測図3（1／3、1／2）……17
第17図　SE008出土遺物実測図4（1／4）……18
第18図　SK001・004及び出土遺物実測図（1／40、1／3）……19
第19図　SK007及び出土遺物実測図（1／40、1／3）……21
第20図　SK012及び出土遺物実測図（1／40、1／3）……22
第21図　SD018及び出土遺物実測図（1／40、1／3）……22
第22図　その他の遺構及び出土遺物実測図1（1／40、1／30、1／3）……23
第23図　その他の出土遺物実測図2（1／1）……23

写真目次

巻頭写真１　調査区東側竪穴住居群（西から）
巻頭写真２　SE008（南東から）
写真１　調査区東側全景（西から）
写真２　調査区東側（西から）……25
写真３　調査区南西側（北から）……25
写真４　調査区北東側（北から）……26
写真５　SB013（南から）……26
写真６　SC009（西から）……26
写真７　SC009（南東から）……26
写真８　SC010・015（南東から）……26
写真９　SC010・014・015（西から）……26
写真10　SC011（南から）……27
写真11　SC020（西から）……27
写真12　SC021（南から）……27
写真13　SE008（南東から）……27
写真14　SE008井戸側（北から）……27
写真15　SK001（北東から）……27
写真16　SK004（北から）……28
写真17　SK007（北から）……28
写真18　SK012（北から）……28
写真19　SD018（北西から）……28
写真20　SD018南側土層……28
写真21　SP002土層……28

写真１　調査区東側全景（西から）

Ⅰ はじめに

1　調査にいたる経過

平成16年６月29日付けで山根一貴氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区竹下５丁目425の物件に関して、共同住宅建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号16－２－337）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号38－0085・遺跡略号NAK）に含まれており、北側に隣接する共同住宅建設時に行われた第75次調査においては非常に濃密な遺構群が確認されている地点である。この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上平成16年７月20日に申請地内の試掘調査を行い、現況地表面から30～45cmほどの鳥栖ローム層上面で竪穴住居跡・ピット等の遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成16年度に発掘調査、平成17年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお申請地749.38㎡のうち、調査対象としたのは建物建築部分の366.38㎡で、駐車場等として使用される残地に付いては、遺構面まで工事の影響が及ばないため現状保存することとしている。なお今回は個人事業のため一部国庫補助金を充当している。

調査期間は平成16年10月18日～平成16年11月25日である（調査番号0455）。調査面積は350㎡、遺物はコンテナ24箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては山根一貴様をはじめとする関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2　調査体制

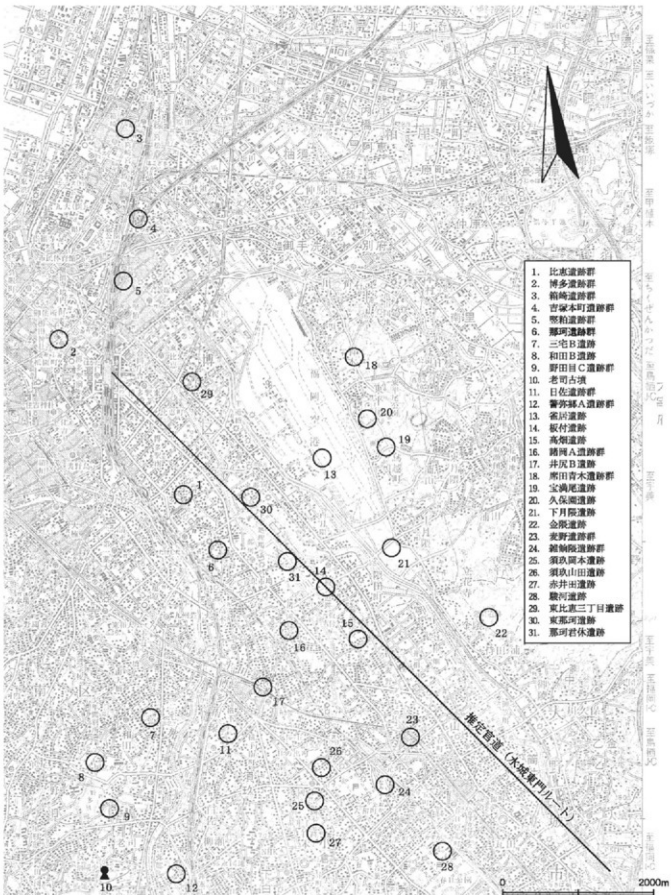
事業主体　山根一貴
調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文課財課長　　山口譲治
　　調査第２係長　　池崎譲二
調査庶務　文化財整備課　御手洗清（前任）　鈴木由喜（現任）
調査担当　調査第２係　長家伸
調査作業　澄川アキヨ　中村フミ子　岩本三重子　越智信孝　藤野トシ子　中村サツエ
　　藤野幾志 西川シズ子　宮崎幸子　栗野孝子　中島道夫

Ⅱ 調 査 の 記 録

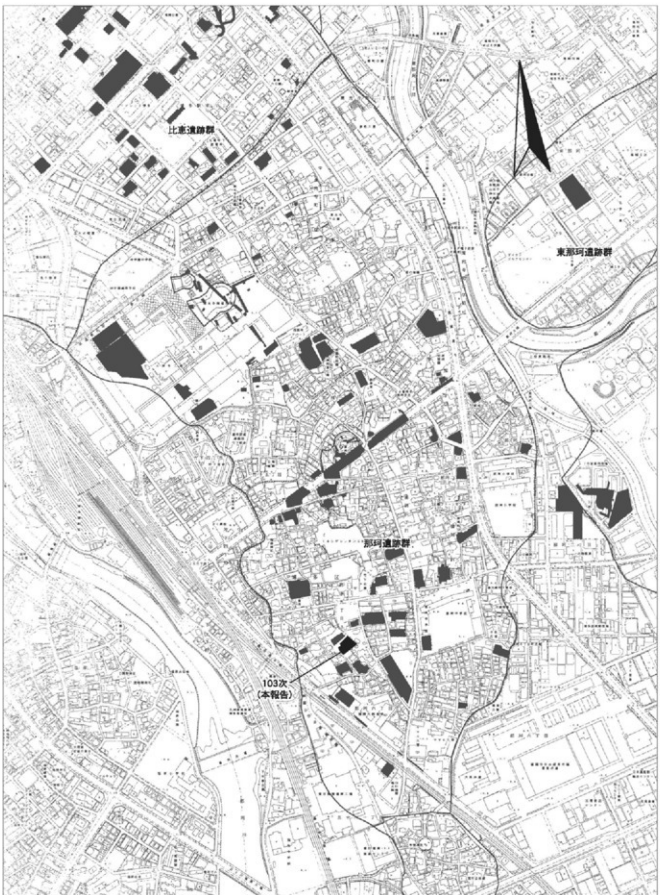
1　調査経過

那珂遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩礫層で、この上面に阿蘇噴火火砕流・火山灰である八女粘土層・鳥栖ローム層・新期ローム層が堆積している。北側に隣接する比恵遺跡群とは一連の丘陵上の遺跡群を構成するものと考えられ、その範囲はあわせて南北2.4ｋｍ、東西１ｋｍに及ぶと考えられる。

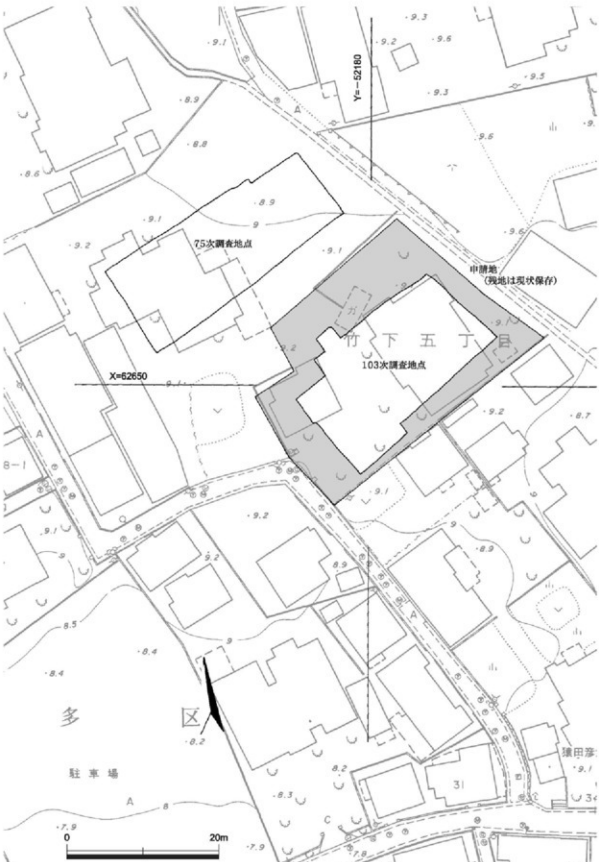
今回の調査対象地はこの丘陵の南側に位置する。周辺の調査事例は各報告書に詳述されているのでそれを参照いただきたい。ここでは北側に隣接する第75次調査について簡単な概要を述べておきたい。第75次調査の調査面積は360㎡で、遺構面標高は8.5～8.7ｍを測りほぼ平坦である。削平が著しく



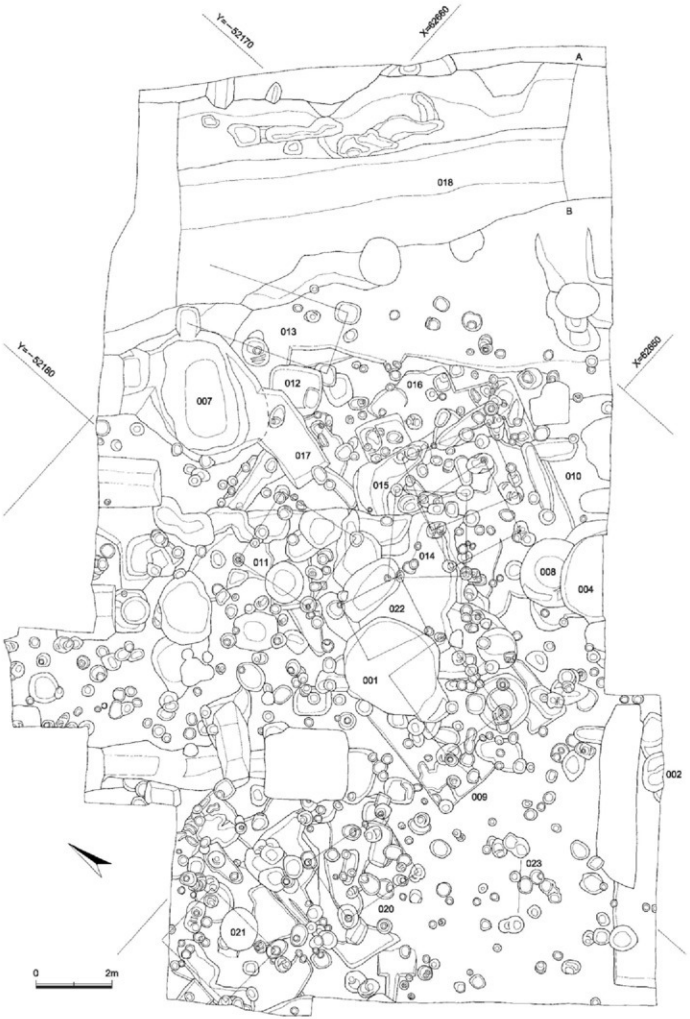
第１図　調査区位置図１（１／50,000）



第２図　調査区位置図２（１／8,000）



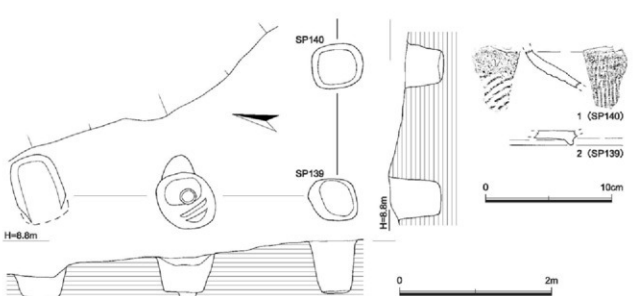
第３図　調査区位置図３（１／500）



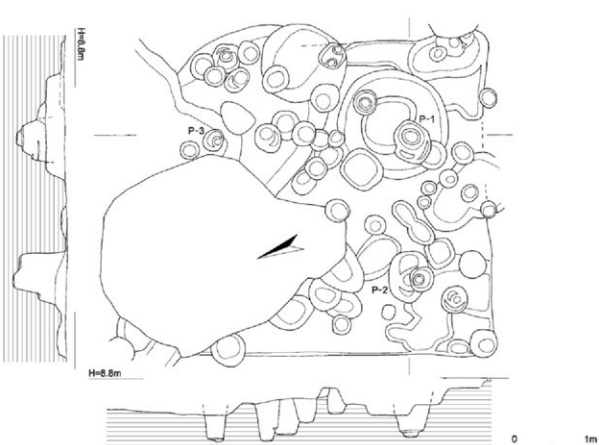
第４図　調査区全体図（１／100）

遺構の遺存状態はよくなかったものの、古墳時代の竪穴住居跡群を初めとして全体に濃密な遺構群が確認された。この調査区で最も古い遺構は弥生時代中期後半に位置付けられる井戸１基であるが、これに伴うその他の生活遺構は確認されていない。古墳時代後期には竪穴住居跡11棟以上を認めることができる。非常に密集しており狭い時期幅の中で建て替えを繰り返していった様子が想像出来る。古代になると掘立柱建物２棟、溝３条を確認しているが、いずれも主軸は磁北を基準としており、該期の計画的遺構配置の一端を伺うことができる。周辺では同様の主軸を呈する掘立柱建物を中心とした官衙的遺構が展開するとともに、那珂遺跡群中心を南北に縦断する溝の存在も知られているところであり、本調査地点がその一部に含まれていることを示している。中世後半代には矩形溝が認められ、屋敷地が形成されていたようである。また調査区東端には水路状の近世溝が掘削されている。

今回の申請地は上述の第75次調査地点南側に隣接しており、これと関連する遺構群の存在を想定しながら調査を開始した。申請地は調査前には駐車場として使用されていた。それ以前は宅地として使用しており、聞き取りによるとその住居は敷地の東側に建てられており、明治の初め頃に建てられたものということである。現況地表面標高は8.9～9.3m前後を測る。調査は重機による表土除去から行うこととした。廃土処理の関係上東半部分の調査を行った後、土砂を反転して西半部分及び北東部分の調査を分割して行った。遺構面は盛り土直下の鳥栖ローム層上面であり、遺構面標高は西端～近世溝SD018西側までは8.6m前後でほぼ平坦であり、溝の東側では7.5～８ｍである。旧家屋に伴うと考えられる小型の攪乱が比較的多く遺構面は荒れているが、大きな攪乱は見られない。また面的な削平が進んでいると考えられ、竪穴住居の竪穴部分の残存状況は不良である。主な検出遺構は古墳時代後期の竪穴住居跡８棟以上、奈良時代後半の掘立柱建物１棟・井戸１基、中世後半～近世の地下式土坑３基、溝１条であり、この他土坑及び多数のピットを確認している。出土遺物の主体は古墳時代後期の土師器・須恵器等であり、第75次調査同様にこの時期の竪穴住居跡を中心とした生活遺構群が濃密に展開していたものと考えられる。また８世紀後半代に位置付けられる井戸とともに、古代に位置付けられる遺物もピット等から一定量出土している。これに対して弥生時代～古墳時代前期の土器の出土量は少ない。



第５図　SB013及び出土遺物実測図（１／50、１／３）



第６図　SC009及び出土遺物実測図（１／50、１／３）

２　遺構と遺物

１）掘立柱建物

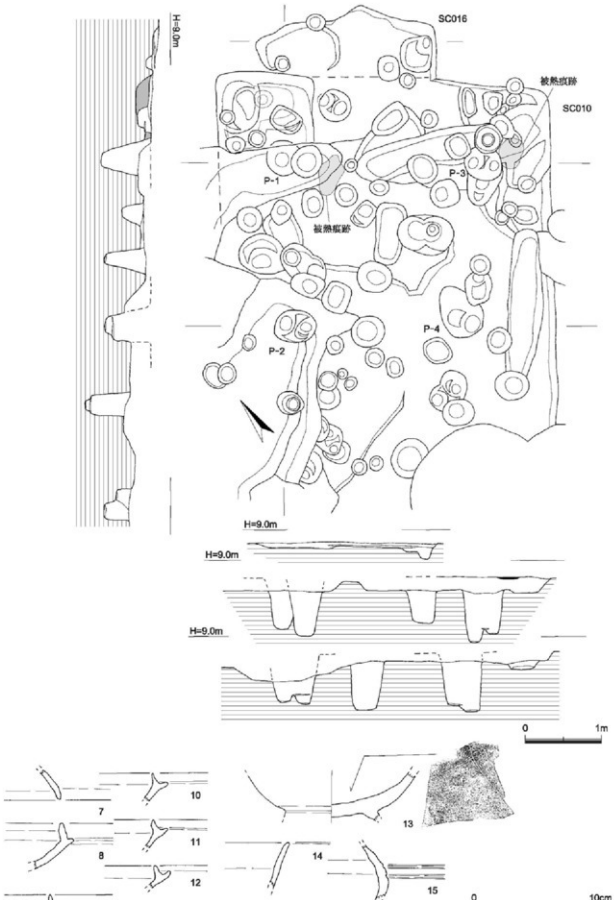
掘立柱建物としてまとめることができたものは古代に位置付けられる１棟のみである。第75次調査においても主軸方位を同じくする掘立柱建物・溝が確認されており、今回の建物もこれと関連するものと考えられる。また多くの遺物が出土したSE008もほぼ同時期に近いものと考えられる。

SB013（第５図）

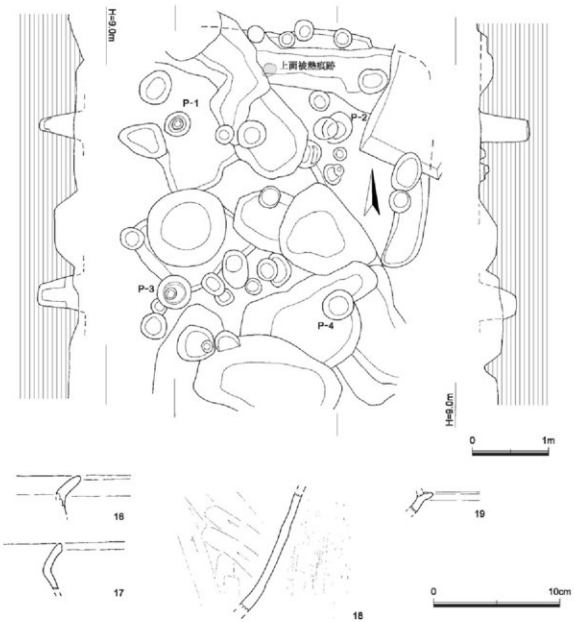
調査区東側で検出する。東側をSD018によって失っているが、第75次調査掘立柱建物例などから１間×２間に復元できる。規模は梁行1.8m（１間）、桁行き４m（２間）を測り、主軸方位をN－12°－Wにとる。柱穴掘り方は一辺60～80cmの（長）方形にとり、検出面からの深さは50～70cmである。埋土は暗褐色土で、土層上では柱痕跡は認められなかった。古代に位置付けられる土師器、須恵器が出土している。

出土遺物（第５図）

１は須恵器甕の頸部付近の小破片で、口縁部は失われている。外面は平行叩きの後、横ナデを行う。内面には青海波の当て具痕が明瞭に残る。焼成は良好で、器壁表面は暗灰色、内部はセピア色を呈する。２は焼成土師質の高台付き坏である。高台断面はやや外側に開き気味となる。



第７図　SC010・016及び出土遺物実測図（１／50、１／３）



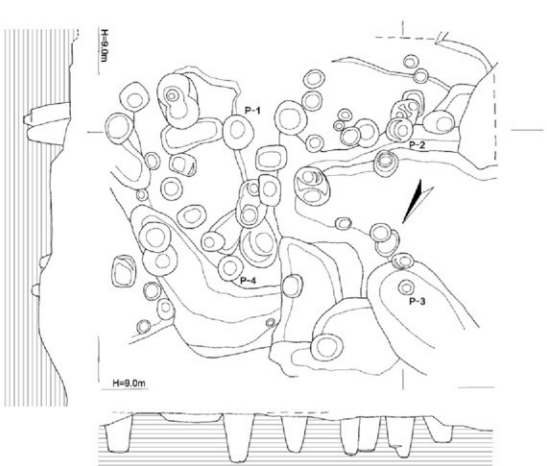
第８図　SC011及び出土遺物実測図（１／50、１／３）

２）竪穴住居跡

竪穴住居跡として確認でき、ここで報告し得たのは古墳時代後期の８棟であるが、削平が進み竪穴部分が失われているものを含めると本来的には更に多くの竪穴住居が存在していたものと考えられる。また竪穴住居に伴う主柱穴と考えたものの他に、竪穴住居の床面から掘り下げられたことが想定できる残存状況の良好な柱穴が非常に多く残っており、周辺の調査成果（22・55・75次調査）からも本調査地点周辺を古墳時代後期の集住地区として考えることができる。

SC009（第６図）

調査区中央で検出する。南側は竪穴が僅かに残存しており、検出面からの壁高５cm前後を測る。埋土はロームブロックを含む黒褐色土である。また南西・南東のコーナー部分にはロームブロックを多く混合した貼り床を行っている。北側は地下式土坑及び撹乱状の土坑によって削平されており、明



第９図　SC014及び出土遺物実測図（１／50、１／３）

確なプランは不明瞭となっているが、東西長4.1m、南北復元長4.5mの平面長方形に復元できる。また主柱穴はＰ１～４（Ｐ４は削平により欠失する）の４本と考えられる。床面に焼土・被熱痕跡・粘土等は認められなかった。出土遺物は土師器・須恵器の小破片のみで小田編年Ⅳ期に相当するものと考えられる。

出土遺物（第６図）

３～５は須恵器蓋坏である。３・４は坏蓋で、ともに口縁部は開き気味となり、端部は丸く納めている。４の天井部には回転ヘラ削りが行われている。５は坏身である。立ち上がりの先端を失っているが、短く斜めに立ち上がるものであろう。６は弥生時代中期後半に位置付けられる甕の口縁部である。本調査区周辺ではこの時期の遺物は比較的少ないためここで図示しておく。

SC010（第７図）

調査区中央で検出する。SC014との先後関係は不明であるが、SC015に先行する。北及び東壁が残っており、南・西側は切り合い及び撹乱により壁が失われている。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土で、北側の二つのコーナー部分には暗褐色土と黄白色土の混合土による貼り床が行われてい

る。Ｐ１～４の４本柱と考えられ、4.4×５m前後の平面長方形プランに復元できる。新出の須恵器も出土しているが、大半の出土須恵器より小田編年のⅣ期に相当するものと考えられる。

出土遺物（第７図）

図示したのはいずれも須恵器である。７は坏蓋である。口縁端部内面が僅かに肥厚する。８～12は坏身口縁部小破片である。全体に立ち上がりは短く、内傾している。13は高台付き坏である。高台は「ハ」字形に強く広がる。14は口径５cm前後の壺形土器の口縁部破片である。15は壺胴部破片である。２条の沈線を有する。

SC011（第８図）

調査区中央で検出し、SC015に切られる。北壁と東壁部分の周溝が残るのみである。住居跡埋土は北東隅では検出面から10cmほど残っているが、西側の大半は撹乱によって失われている。埋土は暗褐色土と鳥栖ロームの混合土である。Ｐ１～４の４本柱で、一辺４m程のプランに復元できる。北壁の溝上面に径15cm、厚さ３cmの被熱痕が認められるが、焼土・粘土は検出していない。土師器・須恵器の小破片が出土し、須恵器の蓋坏の外面は回転ヘラ削りを行っているものはほとんどなく、ヘラ切り未調整のもののみである。

出土遺物（第８図）

16～18は土師器甕である。16は焼土面直上で出土したものである。17は口縁端部を三角形に作り出している。胴部に叩きを行うものと考えられる。18は外面縦刷毛、内面ヘラ削りを行う。19は須恵器の坏身である。

SC014（第９図）

調査区中央で検出する。埋土はロームブロックを含んだ暗褐色土である。南側壁溝の一部を確認するのみで、周辺の竪穴住居跡との先後関係も不明である。Ｐ１～４の４本柱で住居規模は一辺４m程度に復元できる。出土遺物は土師器・須恵器小破片のみで、小田編年Ⅲb～Ⅳ期に相当する。

出土遺物（第９図）

20・21は須恵器坏蓋である。口縁部と天井部の境に浅い沈線が残る。22は土師器の把手である。接合方法は挿入式であろう。

SC015（第10図）

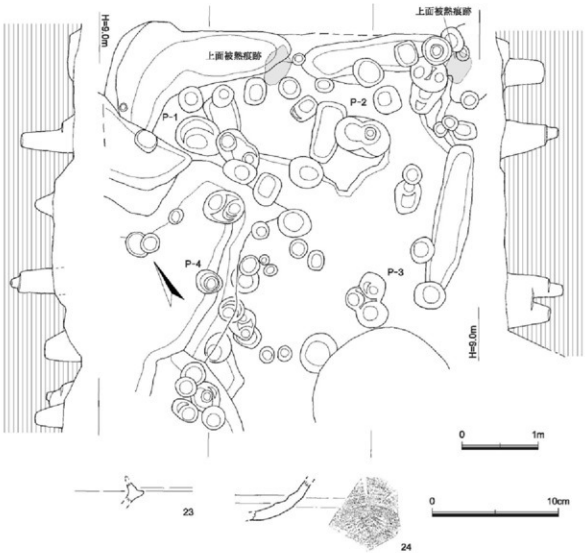
調査区中央で検出する。SC010及び011を切る。北側及び東側の壁溝が残っており、埋土はロームブロック混じりの暗褐色土である。北壁中央部の壁溝が切れる部分の上面に被熱痕跡が残っており、竈の痕跡である可能性が考えられる。主柱はＰ１～４の４本で、東西長５m、南北復元長4.5mを測る。土師器・須恵器の小破片が出土しており、小田編年のⅣ期に相当する。

出土遺物（第10図）

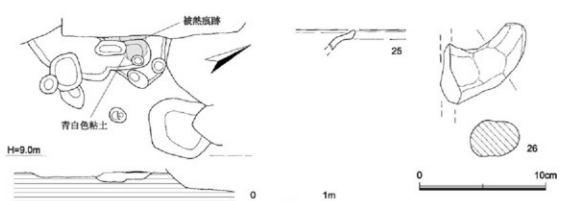
23は須恵器坏身である。立ち上がりは短く内傾している。24はＰ３から出土した須恵器椀底部である。胴部と底部の境はヘラ切りによる。底部外面には擬格子の当て具痕が残り、その上から粗いナデを行う。

SC016（第７図）

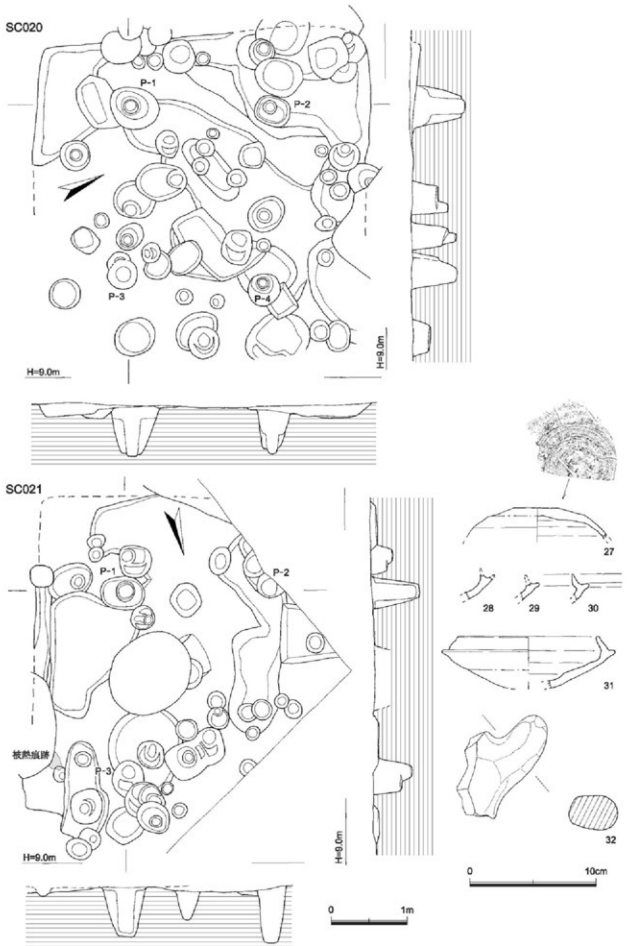
調査区中央で検出する。SC010北側に北東コーナー部分のみが確認できている。埋土はロームブロックを含む暗褐色土でSC010との先後関係は明らかでない。SC010の一部である可能性も考えられたが、ここでは別棟の竪穴住居跡の一部として報告する。主柱・その他の施設等は不明である。実測し得る遺物はないが、土師器・須恵器の小破片が出土しており、須恵器蓋坏類の外面はヘラ削りを行うものと、ヘラ切り後未調整のものが混在している。



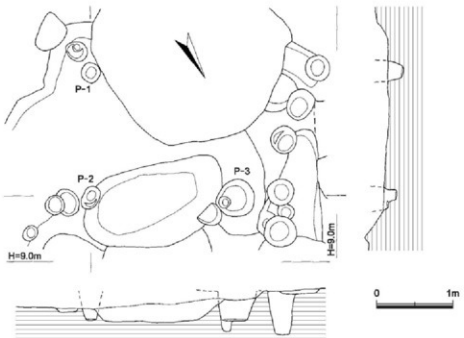
第10図　SC015及び出土遺物実測図（1／50、1／3）



第11図　SC017及び出土遺物実測図（1／50、1／3）



第12図　SC020・021及び出土遺物実測図（1／50、1／3）



第13図　SC022実測図（1／50）

SC017（第11図）

調査区東側で検出する。SC010の北側に厚さ２cm程度ロームブロック混じりの暗褐色土が広がっており、竪穴住居跡の一部と考えられた。その東側に被熱痕跡と僅かに青白色粘土が検出され、住居に伴う竈跡と判断した。主柱・竪穴壁面は確認できず、規模は不明である。土師器・須恵器の小破片が出土している。

出土遺物（第11図）

25は須恵器の口縁部破片である。端部は断面三角形の玉縁状に作る。26は土師器把手である。鈍い黄橙色を呈し、胎土には石英砂粒を比較的多く含んでいる。

SC020（第12図）

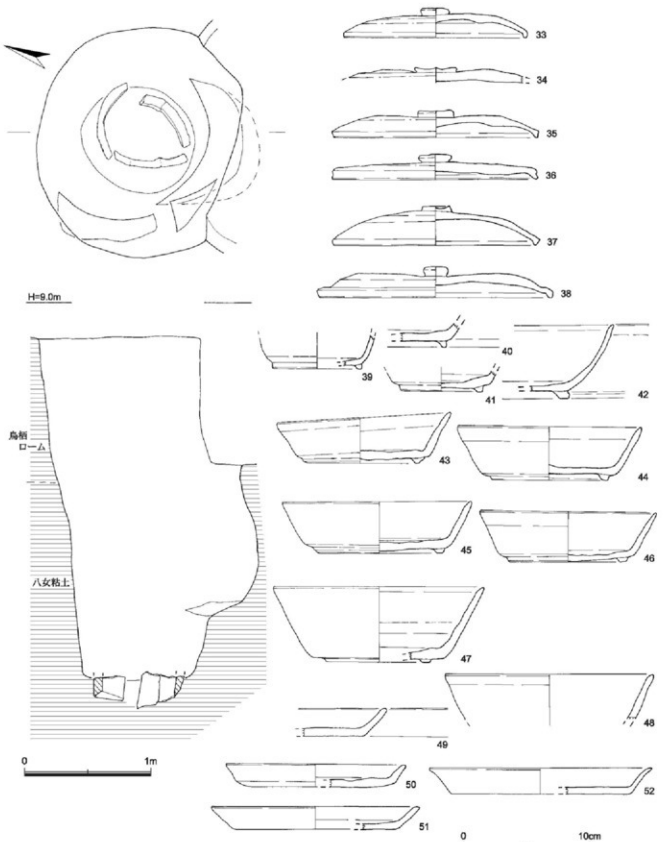
調査区西端で検出する。隣接するSC021との先後関係は明らかでない。住居の西壁と南・北壁の一部を確認しているが、いずれも暗褐色土と鳥栖ロームブロックの２：１混合土で、貼り床にあたるものと考えられる。Ｐ１～４の４本主柱で、平面形は一辺3.9mの方形に復元できる。土師器・須恵器の破片が出土する。

出土遺物（第12図　27～30）

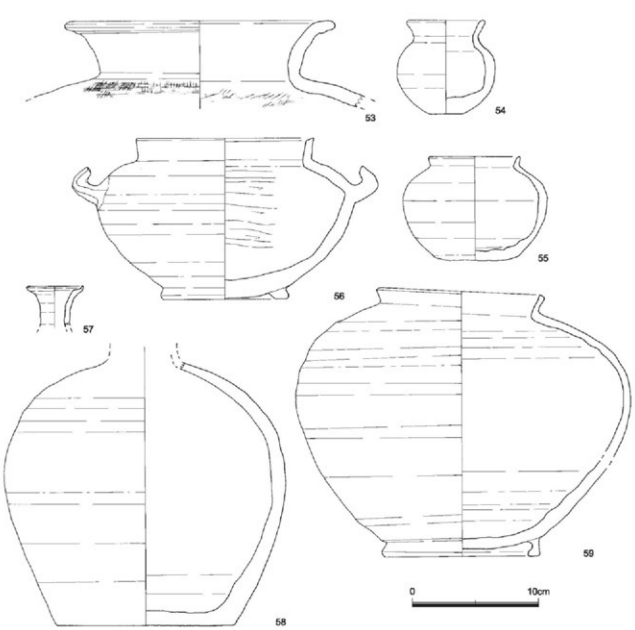
図示し得たのはいずれも須恵器である。27は坏蓋である。天井部外面は中央部を残して回転ヘラ削りを行う。ヘラ記号が残るが全体の形状は明らかでない。28～30は坏身である。口縁部の立ち上がりは短く、内傾するものである。

SC021（第12図）

調査区西端で検出する。SC021の西壁に隣接して壁溝を検出し、この西側に厚さ５cmほどの黒褐色土が広がり、竪穴住居跡と考えた。床面上に１箇所被熱痕跡が残っているが、周辺に粘土の広がりは認められない。４本主柱と考えられ、Ｐ１～３の３本を確認している。黒褐色土除去後には不整形な貼り床を確認したが、SC021の想定範囲外にも貼り床状の掘り込みが広がっており、本来は複数の竪穴住居跡であったものと考えられる。それぞれの規模・形状は不明であるが、いずれの掘り込み



第14図　SE008及び出土遺物実測図１（１／30、１／３）



第15図　SE008出土遺物実測図２（１／３）

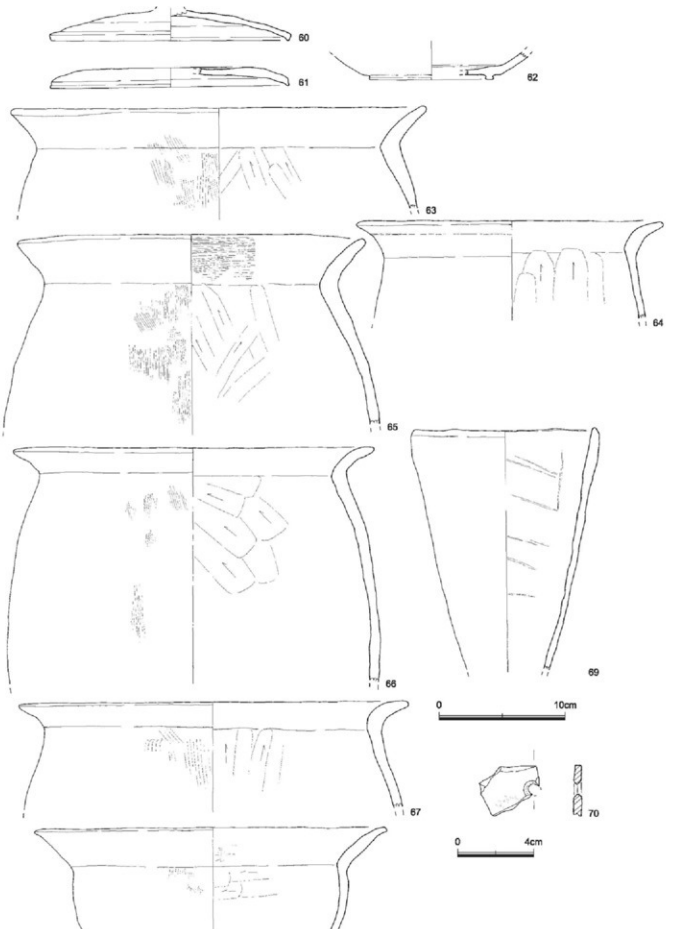
からも土師器・須恵器破片が出土しており、近接した時期の切り合いであると考えられる。小田編年のⅣ期に収まるものであろう。

出土遺物（第12図　31・32）

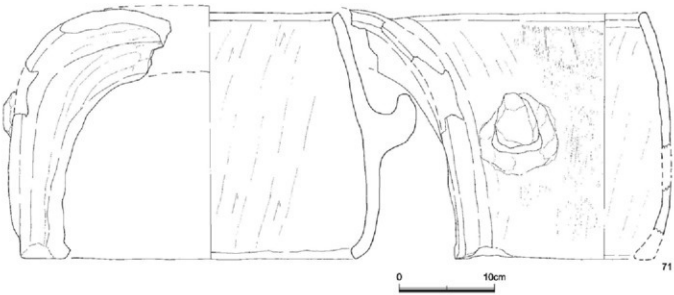
31は須恵器坏身である。外底面の回転ヘラ削りは深く行われ、口縁部の立ち上がりは内傾が進んでいる。32は土師器の把手である。把手はナデ・指押さえにより整形され、器壁の内面には縦方向のヘラ削りが行われている。

SC022（第13図）

調査区中央で検出する。西壁の一部を確認するのみで、埋土はロームブロックを含む暗褐色土である。主柱も明らかでないが、４本柱を抽出することができるため周辺の状況から、古墳時代後期の竪穴住居跡の一部と考えられる。土師器・須恵器の小破片が少量出土するのみである。



第16図　SE008出土遺物実測図３（１／３、１／２）



第17図　SE008出土遺物実測図４（１／４）

３）井戸

SE008（第14図）

調査区中央南端で検出する。南側をSK004に切られるが、平面は径1.8mの円形に復元できる。西～南側の壁面には平坦面を有し、底面は標高６m（検出面からの深さ３m）を測る。また底面に突き刺さるように、３分割された刳り貫き材を使用した井戸側が残っている。この下端部分は鋭角に切り落としており、井戸底に打ち込んで固定したようである。井戸側の痕跡は掘り方内では確認できず、多量の遺物が掘り方全面から出土したことを考えると、井戸廃棄時に井戸側は取り上げられた可能性も考えられる。また埋土は検出面から１mは黒褐色土、2.4mまではローム小粒・炭化物を含んだ暗褐色土、これ以下底面までは八女粘土ブロックを含む黒灰色土となり粘性が非常に強くなる。遺物はコンテナ20箱出土している。土師器の甕・甑、須恵器坏・蓋・甕・高坏・壺等であり、瓦類は認められない。８世紀中頃～後半に位置付けられる。

出土遺物（第14～17図）

33～59は須恵器である。33～38はつまみを有する蓋である。口縁端部は折り曲げて、嘴状に整形している。つまみは比較的低平で、ボタン状のものが多い。天井部外面の調整は33～36が回転ヘラ削りを行い、37・38はヘラ切りによる。39～48は高台付き坏で39～41は小型品である。高台は断面台形～長方形を呈し、低平に作りつけている。外底面は42が回転ヘラ削りを行う他は、ヘラ切りによるものである。49～52は皿である。外底面はヘラ切りによるものである。53は甕の口縁部である。口縁部は僅かに外側に引き出し、端部は丸く整形する。胴部は外面平行叩きの後、カキ目状の調整を行う。内面は青海波文を回転ナデにより部分的にナデ消している。54・55は小型壺である。54は口縁部～頸部は回転ナデ、胴部は粗いヘラ状工具によるナデによって整形している。55は口縁部が短く直立している。胴部最下位～底部は回転ヘラ削りを行っている。56は把手と高台を貼り付けている直口壺である。胴部は上半が回転ナデ、張り出し以下は回転ヘラ削りを行う。内面は横方向のヘラ削りを行っている。把手は舌状を呈し、先端部を巻き上げている。57は壺の口縁部で、端部を上方につまみ上げている。58は平底の壺胴部である。外面下半～外底面は回転ヘラ削りを行い、上半

部は回転ナデによる。内面は全体に回転ナデの痕跡が残る。59は高台付きの直口壷である。外面は張り出し部のやや上から回転ヘラ削りを行う。内面～外面上半1／4程は回転ナデによるものである。

60～69は土師器である。60・61は坏蓋である。60の天井部外面には回転ヘラ削りが行われている。62は高台付き坏である。屑部外面下半に回転ヘラ削りの痕跡が残っている。63～67は甕、68は鉢状となる。口縁部はいずれも「く」字状に大きく開いている。内面には明瞭なヘラ削りが行われ、外面はヘラ状工具による刷毛～ナデ状の調整が行われる。69は筒状の製品である。図上上端部は外面端部を斜めに切り落とし、下端部に向けてすぼまりながら整形されている。焼成は土師質であるが、器壁断面をみると、灰色に還元化した発色をしている。調整は内外面ナデと考えられるが、内面には押圧によりついたような条線が認められる。また外面には2次的な焼成の痕跡が残る。71は移動式竈である。内面は縦方向のヘラ削り、外面縦刷毛による。器壁に煤の付着はほとんど認められない。70は凝灰質砂岩による石包丁である。

4）土坑

SK001（第18図）

調査区中央部で検出する。本体は一辺2.5m前後の隅丸方形を呈し、南側に階段状の張り出し部を有する。平面隅丸方形部分は底面がほぼ平坦で壁面は部分的にオーバーハングしている。また階段状の掘り込みは各段の高さ50cm程を測る。埋土は検出面から60cmは褐色土、これ以下はロームブロックを含む黒褐色土である。出土遺物の大半は古墳時代後期の土師器・須恵器が占めるが、少量中世から近世にかかる陶磁器類が出土しており、この時期の地下式土坑と考えられる。

出土遺物（第18図）

72はⅣ類白磁碗の底部である。73・74は陶器碗である。73は胎土赤褐色を呈し、表面に白色釉を塗布する。74は胎土が鈍い黄褐色を呈する。75は土師質土器の鍋である。

SK004（第18図）

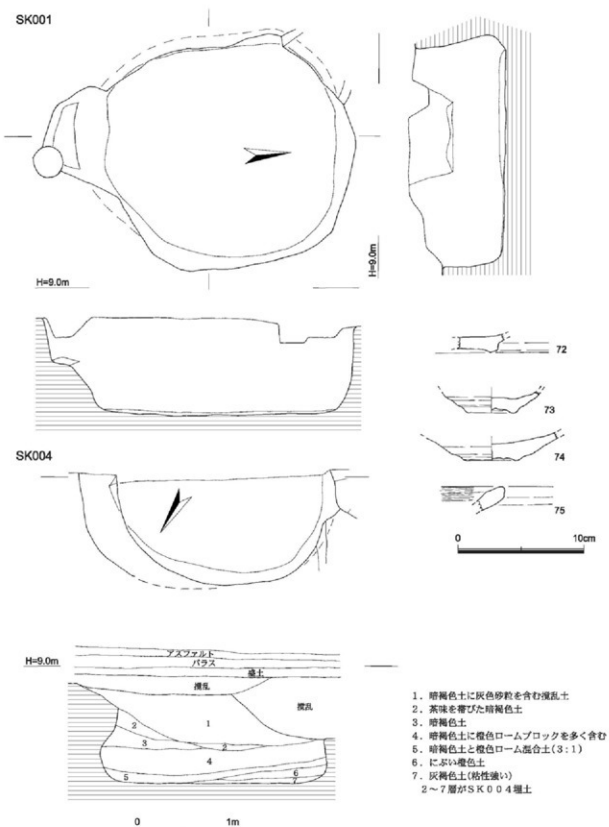
調査区南側で検出する。本体は径2.2m前後の円形を呈するものと考えられ、断面は袋状にオーバーハングしているが、東～北側では上部が大きく開いている。また床面は平坦である。埋土は下層（3～7層）は水平に堆積し、上層（2層）は上面からの流入土状である。SE008を切っているためか、奈良時代の土師器・須恵器が多く出土しているが、SK001同様、中世後半代にかかる瓦質土器類が出土しており、図示し得た遺物はないが、埋土・形状からもSK001と同じく中世～近世の地下式土坑と考えられる。

SK007（第19図）

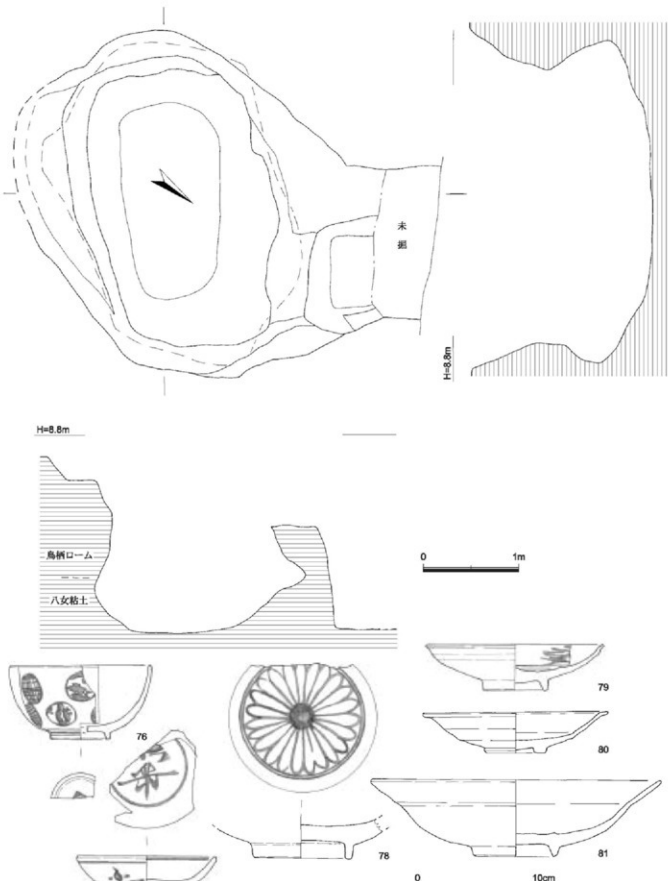
調査区北東側で検出する。南側にやや歪な平面略長方形の掘り込みを有する。この部分は長軸3.6m、短軸2.8m前後を測る。断面形状は下半が抉れ、上半は大きく開いている。この下半の抉りこみはおおよそ鳥栖ローム層と八女粘土層の境にあたり、各断面を見てもこの部分で抉りこみが認められている。これらの抉りこみは湧水による地山崩落による可能性も考えられる。またこの掘り込みに連結して北側にも掘り込みを有するが、こちらは断面形状の均整が取れているようである。いずれも検出面からの深さは1.9m程で、平面的には切り合い関係は認められず、一連の遺構である可能性が高い。埋土は両掘り込み間の高まりのレベルまでは灰褐色土、これ以下は鳥栖ロームの大ブロックを含む灰褐色土である。出土遺物から近世に位置付けられる。

出土遺物（第19図）

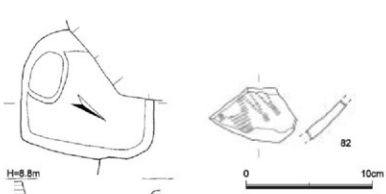
76～79は染付の碗・皿類である。79は内底面の釉を輪状に掻き取る。80・81は陶器皿で、80は内底面及び高台畳付に白色粘土の目跡が残る。81は灰白色を呈し、内底面の釉を輪状に掻き取る。



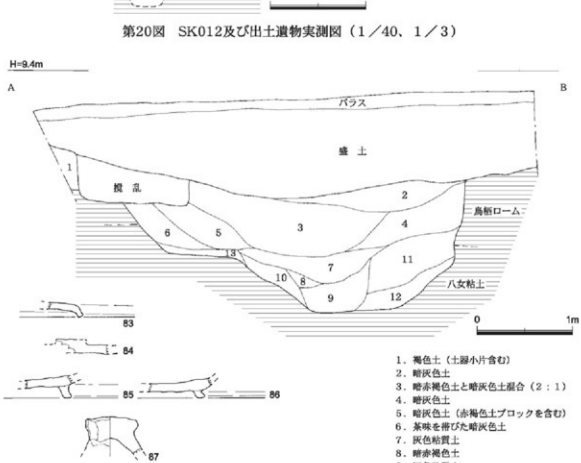
第18図　SK001・004及び出土遺物実測図（1／40、1／3）



第19図　ＳＫ007及び出土遺物実測図（1／40、1／3）



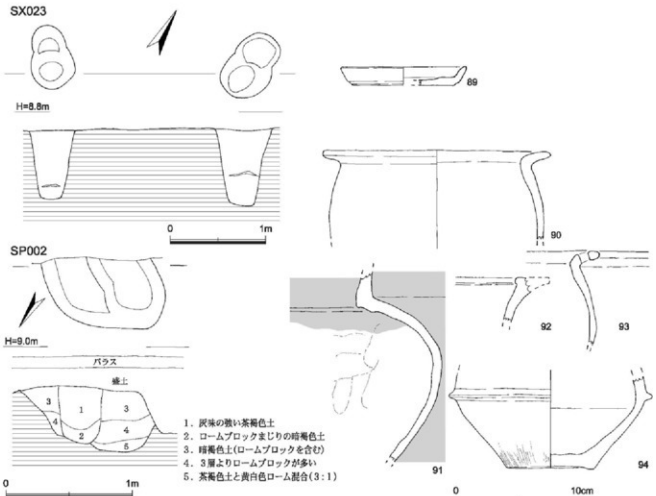
第20図　SK012及び出土遺物実測図（1／40、1／3）



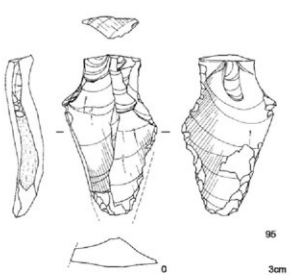
第21図　SD018及び出土遺物実測図（1／40、1／3）

SK012（第20図）

調査区北東側で検出し、SB013を切る。一辺1.3mの方形を呈し、検出面からの深さは30cmで底面はほぼ平坦であるが、南側隅にピット状の掘り込みを有する。壁は直立に近く均整な掘り方である。



第22図　その他の遺構及び出土遺物実測図１（１／40、１／30、１／３）



第23図　その他の出土遺物実測図２（１／1）

埋土はロームブロックを比較的多く含む暗褐色土で、ピット状の掘り込み部分は暗褐色土と烏栖ローム・八女粘土の混合土である。遺物は少量であるが青磁破片を含んでおり、中世前半代に位置付けられる。

出土遺物（第20図）

82は同安窯系の青磁碗である。内面に櫛状工具による施文が行われる。

5） 溝

SD018（第21図）

調査区東端で検出する。北側に隣接する第75次調査地点においてもこの溝の延長部分を確認している。1層は旧整地土（時期不明）、2～12層が第75次調査SD023対応埋土、13層が第75次調査SD024対応埋土と考えられる。2～12層はしまりのない埋め立て土で、近世陶磁器類が出土している。この溝上に明治初め頃に家屋が建てられていたということであり、近世の水路として使用されていたものと考えられる。13層は粗砂を含む砂質土層で、古代の遺物を中心として、滑石製石鍋転用品等の中世遺物が少量出土している。第75次調査SD024においても同様の埋土に古代末～中世前半の遺物が含まれていた。この部分には近世の遺物は混入しておらず、古代～中世の流路の痕跡が残っている可能性が考えられ、近世の水路もこれを踏襲したものと考えられる。

出土遺物（第21図）

83～86は須恵器である。83・84は蓋、85・86は高台付き坏である。坏の外底面はヘラ切りである。87は弥生土器の蓋であろうか。88は滑石製石鍋の転用品である有孔石製品である。

6） その他の遺構・遺物

SX023（第22図）

調査区南西隅で検出する。一対の柱穴を確認したが、埋土が異なるため竪穴住居跡に伴うものではないと判断した。柱穴はともに2段に掘り下げられており、検出面からの深さは70～80cmを測る。埋土はローム粒を多く含んだしまりのない茶褐色土である。埋土からは中世以降のものと考えられ、門状の施設が想定できる。出土遺物に土師器皿がある。

出土遺物（第22図 89）

89は土師器皿である。外底面は糸切りを行う。

SP002（第22図）

調査区南西端で検出した柱穴で、柱痕跡を確認している。弥生時代中期後半の土器がまとまって出土しており、分布は散漫ながら該期の遺構が展開していることを確認した。

出土遺物（第22図 90～94）

90は「く」字状に開く口縁部を有する甕である。91は丹塗りを施した壷である。92は鰭状の口縁部である。93は有孔の壷口縁部である。94は壷の胴部下半である。胴部に一条の突帯を有し、底部付近には縦刷毛が残る。

撹乱中出土遺物（第23図）

95は撹乱掘り下げ中に出土した石器であるが、出土位置については不明である。本資料は表面の摩滅や新しい傷（ガジリ）が著しい。素材は不純物を含む漆黒黒曜石であり、平坦な自然面から腰岳産と見られる。縦長剥片であり、単設の平坦打面で数回の先行剥離が行われている。縁辺はガジリで二次調整は不明であるが、僅かに微細剥離が観察できる。削器などの用途が推定される。時期は判断し難いが、技術的特徴から後期旧石器時代後半か弥生時代前期前半頃か。（この項 吉留）

写真２　調査区東側（西から）

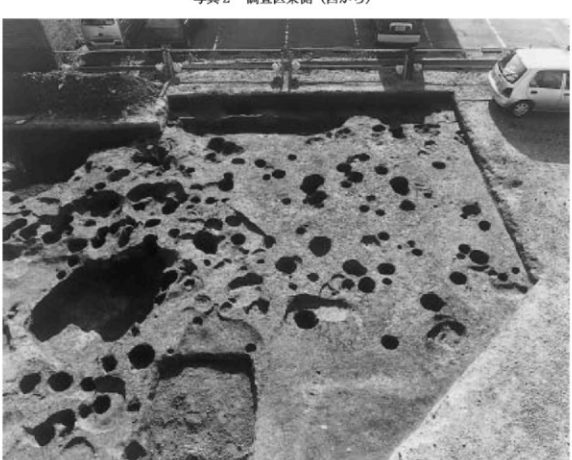


写真３　調査区南西側（北から）

写真４　調査区北東側（北から）

写真５　SB013（南から）

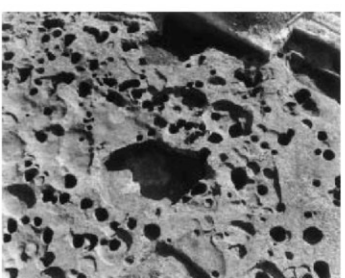


写真６　SC009（西から）

写真７　SC009（南東から）

写真８　SC010・015（南東から）

写真９　SC010・014・015（西から）

写真10　SC011（南から）

写真11　SC020（西から）

写真12　SC021（南から）

写真13　SE008（南東から）

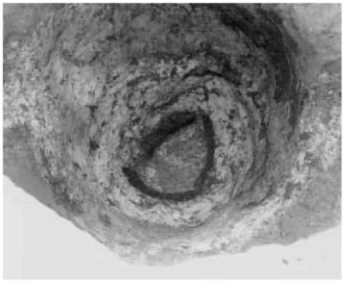


写真14　SE008井戸側（北から）

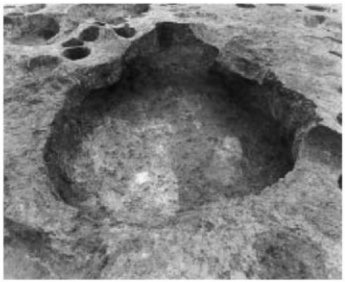


写真15　SK001（北東から）

写真16　SK004（北から）

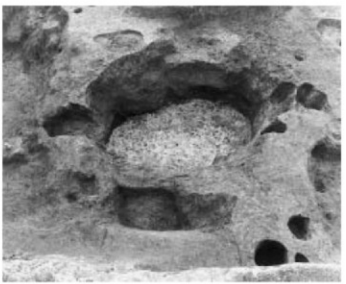


写真17　SK007（北から）

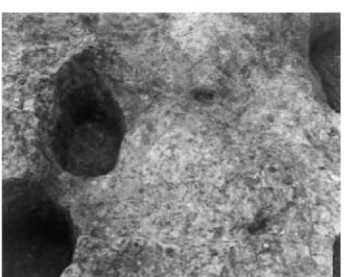


写真18　SK012（北から）

写真19　SD018（北西から）

写真20　SD018南側土層

写真21　SP002土層

書名ふりがな　なかよんじゅうに
書　名　那珂42
副書名　―那珂遺跡群第103次調査報告―
巻　次
シリーズ名　福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号　888
編著者名　長家　伸
編集機関　福岡市教育委員会
発行機関　福岡市教育委員会
発行年月日　20060331
作成法人ＩＤ
郵便番号　810－8621　　電話番号　092－711－4667
住　所　福岡市中央区天神１－８－１
遺跡名ふりがな　なかいせきぐん
遺跡名　那珂遺跡群
所在地ふりがな　ふくおかし　はかたく　たけした５ちょうめ425
遺跡所在地　福岡市博多区竹下５丁目425
市町村コード　40132　　遺跡番号38－0085
北　緯　33°34′1″
東　経　130°26′8″（世界測地系）
調査期間　20041018～20041125
調査面積　350
調査原因　共同住宅建設
種　別　集落
主な時代　古墳
遺跡概要　集落　竪穴住居８以上＋掘立柱建物１＋井戸１＋地下式土坑３＋土坑１＋溝１＋ピット多数
特記事項

福岡市埋蔵文化財調査報告書第888集

那　珂　42

―那珂遺跡群第103次調査報告―

2006年（平成18年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　有限会社浦永印刷
福岡市東区原田１丁目９番23号